十六日

宮沢賢治

よく晴れて前の谷川もいつもとまるでちがって楽しくごろごろ鳴った。盆の十六日なので鉱山も休んで給料は呉れ畑の仕事も一段落ついて今日こそ一日そこらの木やとうもろこしを吹く風も家のなかの煙に射す青い光の棒もみんな二人のものだった。

おみちは朝から畑にあるもので食べられるものを集めていろいろに取り合せてみた。嘉吉は朝いつもの時刻に眼をさましてから寝そべったまま煙草を二、三服ふかしてまたすうすう眠ってしまった。

この一年に二日しかない恐らくは太陽からも許されそうな休みの日を外では鳥が針のように啼き日光がし

んしんと降(ふ)った。嘉吉がもうひる近いからと起(おこ)されたのはもう十一時近くであった。

　おみちは餅(もち)の三いろ、あんのと枝豆(えだまめ)をすってくるんだのと汁(しる)のとを拵(こしら)えてしまって膳(ぜん)の支度(したく)もして待(ま)っていた。嘉吉は楊子(ようじ)をくわいて峠(とうげ)へのみちをよこぎって川におりて行った。それは白と鼠(ねずみ)いろの縞(しま)のある大理石(だいりせき)で上流(じょうりゅう)に家のないそのきれいな流(なが)れがざあざあ云(い)ったりごぼごぼ湧(わ)いたりした。嘉吉(かきち)はすぐ川下(かわしも)に見える鉱山(こうざん)の方を見た。鉱山も今日はひっそりして鉄索(てっさく)もうごいていず青ぞらにうすくけむっていた。嘉吉はせいせいしてそれでもまだどこかに溶(と)けない熱(あつ)

いかたまりがあるように思いながら小屋（こや）へ帰って来た。嘉吉は鉱山の坑木（こうぼく）の係（かか）りではもう頭株（かしらかぶ）だった。それに前は小林区（しょうりんく）の現場監督（げんばかんとく）もしていたので木のことではいちばん明るかった。そして冬撰鉱（せんこう）へ来ていたこの村の娘（むすめ）のおみちと出来てからとうとうその一本調子（ちょうし）で親たちを納得（なっとく）させておみちを貰（もら）ってしまった。親たちは鉱山から少し離（はな）れてはいたけれどもじぶんの栗（くり）の畑（はたけ）もわずかの山林もくっついているいまのところに小屋をたててやった。そしておみちはそのわずかの畑に玉蜀黍（とうもろこし）や枝豆（えだまめ）やささげも植（う）えたけれども大抵（たいてい）は嘉吉を出してやってから実家（じっか）へ手伝（てつだ）いに行った。そうして

まだ子供がなく三年経った。
嘉吉は小屋へ入った。
（お前さま今夜ほうのきさ仏さん拝みさ行ぐべ。）おみちが膳の上に豆の餅の皿を置きながら云った。（うん、うな行ったただがら今年ぁいいだなぃがべが。）嘉吉が云った。
（そだら踊りさでも出はるますか。）俄かにぱっと顔をほてらせながらおみちは云った。（ふん見さ行ぐべさ。）嘉吉はすこしわらって云った。膳ができた。いくつもの峠を越えて海藻の〔数文字空白〕を着せた馬に運ばれて来たてんぐさも四角に切られて朧ろにひ

かった。嘉吉（かきち）は子供（こども）のように箸（はし）をとりはじめた。

ふと表（おもて）の河岸（かわぎし）でカーンカーンと岩を叩（たた）く音がした。

二人はぎょっとして聞き耳をたてた。

音はなくなった。（今頃（いまごろ）探鉱（たんこう）など来るはずあないな。）嘉吉は豆の餅（もち）を口に入れた。音がこちこちまた起（おこ）った。

（この餅拵（こさ）えるのは仙台領（せんだいりょう）ばかりだもな。）嘉吉はもうそっちを考えるのをやめて話しかけた。（はあ。）おみちはけれども気の無（な）さそうに返事（へんじ）してまだおもての音を気にしていた。

（今日（こんにち）はちょっとお訪（たず）ねいたしますが。）門口で若（わか）い

水々しい声が云った。（はあい。）嘉吉は用があったからこっちへ廻れといった風で口をもぐもぐしながら云った。けれどもその眼はじっとおみちを見ていた。（あっ、こっちですか。今日は。ご飯中をどうも失敬しました。ちょっとお尋ねしますが、この上流に水車がありましょうか。）若いかばんを持って鉄槌をさげた学生だった。（さあ、お前さんどこから来なすった。）嘉吉は少しむかっぱらをたてたように云った。（仙台の大学のもんですがね。地図にはこの家がなく水車があるんです。）（ははあ。）嘉吉は馬鹿にしたように云った。青年はすっかり照れてしまった。

（まあ地図をお見せなさい。お掛けなさい。）嘉吉は自分も前小林区に居たので地図は明るかった。学生は地図を渡しながら云われた通りしきいに腰掛けてしまった。おみちはすぐ台所の方へ立って行って手早く餅や海藻とささげを煮た膳をこしらえて来て、
（おあが※［＃小書き平仮名ん、134-7］な※［＃小書き平仮名ん、134-7］え）と云った。
（こいつあ水車じゃありませんや。前じきそこにあったんですが掛手金山の精錬所でさ。）（ああ、金鉱を搗くあいつですね。）（ええ、そう、そう、水車って云えば水車でさあ。ただ粟や稗を搗くんでない金を搗くだ

けで。）（そしてお家はまだ建たなかったんですね、ぃやお食事のところをお邪魔しました。ありがとうございました。）

　学生は立とうとした。嘉吉はおみちの前でもう少してきぱき話をつづけたかったし、学生がすこしもこっちを悪く受けないのが気に入ってあわてて云った。

（まあ、ひとつおつき合いなさい。ここらは今日盆の十六日でこうして遊んでいるんです。かかあもせっ角拵えたのお客さんに食べていただかなぃと恥かきますから。）（おあがんな※［＃小書き平仮名ん、134-16］え。）

おみちも低く云った。

　学生はしばらく立っていたが決心したように腰をおろした。（そいじゃ頂きますよ。）（はっは、なあに、こごらのご馳走てばこったなもんでは。そうするどあなだは大学では何のほうで。）（地質です。もうからない仕事で。）餅を噛み切って呑み下してまた云った。（化石をさがしに来たんです。）化石も嘉吉は知っていた。（そこの岩にありしたか。）（ええ海百合です。外でもとりました。この岩はまだ上流にも二、三ケ所出ていましょうね。）（はあはあ、出てます出てます。）学生は何でももう早く餅をげろ呑みにして早く生きたいようにも見えましたやっぱり疲れてもいればこういう

款待に温さを感じてまだ止まっていたいようにも見えた。

（今日はそうせばとどこまで。）（ええ、峠まで行って引っ返して来て県道を大船渡へ出ようと思います。）

（今晩のお泊りは。）（姥石まで行けましょうか。）（はあ、ゆっくりでごあ※［＃小書き平仮名ん、135-11］す。）

（いや、どうも失礼しました。ほんとうにいろいろご馳走になって、これはほんの少しですが。）学生は鞄から敷島を一つとキャラメルの小さな箱を出して置いた。（なあにす、そたなごとお前さん。）おみちは顔を赤くしてそれを押し戻した。

（もうほんの。）　学生はさっさと出て行った。（なあんだ。　あと姥石まで煙草売るどこなぃも。　ぼかげで置いで来。）　おみちは急いで草履をつっかけて出たけれども間もなく戻って来た。（脚早くて。　とっても。）（若いがら律儀だもな。）　嘉吉はまたゆっくりくつろいでうすぐろいてんを砕いて醤油につけて食った。

　おみちは娘のような顔いろでまだぼんやりしたように座っていた。　それは嘉吉がおみちを知ってからわずかに二度だけ見た表情であった。

（おらにもああいう若ぃづぎあったんだがな、　ああいう面白い目見る暇なぃがったもな。）　嘉吉が云った。

（あん。）おみちはまだぼんやりして何か考えていた。

嘉吉はかっとなった。

（じゃぃ、はきはきど返事(へんじ)せじゃ。何でぁ、あたな人形こさ奴(やつ)さぁすぐにほれやがて。）

（何云うべこの人ぁ。）おみちはさぁっと青じろくなってまた赤くなった。

（ええ糞(くそ)そのつら付(つき)。見だぐない。どこさでもけづがれ。びっき。）嘉吉はまるで落(お)ちはじめたなだれのように膳(ぜん)を向(むこ)うへけ飛(と)ばした。おみちはとうとううつぶせになって声をあげて泣(な)き出した。

（何だぃ。あったな雨降(ふ)れば無(な)ぐなるような奴(ひとつこ)爪(ぱだ)こ

さ、食えの申（もう）し訳（わ）げなぃの機嫌（きげん）取（と）りやがて。）嘉吉はまたそう云ったけれどもすこしもそれに逆（さから）うでもなくただ辛（つら）そうにしくしく泣いているおみちのよごれた小倉（こくら）の黒いえりや顫（ふる）うせなかを見ていると二人とも何年ぶりかのただの子供（こども）になってこの一日をままごとのようにして遊（あそ）んでいたのをめちゃめちゃにこわしてしまったようでからだが風と青い寒天（かんてん）でごちゃごちゃにされたような情（なさけ）ない気がした。

（おみち何でぁその年しててでわらすみだぃに。起（お）ぎろったら。起ぎで片付（かたづ）げろったら。）

おみちは泣（な）きじゃくりながら起きあがった。そして

じぶんはまだろくに食べもしなかった膳(ぜん)を片付けはじめた。
　嘉吉(かきち)はマッチをすってたばこを二つ三つのんだ。それから横(よこ)からじっとおみちを見るとまだ泣きたいのを無理(むり)にこらえて口をびくびくしながらぼんやり眼(め)を赤くしているのが酔(よ)った狸(たぬき)のようにでも見えた。嘉吉は矢もたてもたまらず俄(にわ)かにおみちが可哀(かわい)そうになってきた。
　嘉吉はじっと考えた。おみちがさっきのあの顔いろはこっちの邪推(じゃすい)かもしれない。
及(およ)びもしないあんな男をいきなり一言(ひとこと)二言はなして

そんなことを考えるなんてあることでない。そうだとするとおれがあんな大学生とでも引け目なしにぱりぱり談(はな)した。そのおれの力を感(かん)じていたのかも知れない。それにおれには鉱夫(こうふ)どもにさえ馬鹿(ばか)にはされない肩(かた)や腕(うで)の力がある。あんなひょろひょろした若造(わかぞう)にくらべては何と云(い)ってもおみちにはおれのほうが勝(か)ち目(め)がある。

（おみち、ちょっとこさ来(こ)。）嘉吉(かきち)が云(い)った。

おみちはだまって来て首を垂(た)れて座(すわ)った。

（うなまるで冗談(じょうだん)づごと判(わが)らなぃで面白(おもしろ)ぐなぃもな。盆(ぼん)の十六日ぁ遊(あそ)ばなぃばつまらなぃ。おれ云ったなみ

んなうそさ。な。それでもああいうきれいな男うなだて好(す)ぎだべ。）（好かなぃ。）おみちが甘(あま)えるように云った。

（好ぎたって云ったらおれごしゃぐど思うが。そのこらぃなごと云ってごしゃぐような水臭(みずくさ)ぃおらだなぃな。誰(だれ)だってきれいなものすぎさな。おれだって伊手(いで)ででもいいあねこ見ればその話だてするさ。あのあんこだて好(す)ぎだべ。好ぎだて云え。こう云うごとほんと云うごそ実(じつ)ぁあるづもんだ。な。好ぎだべ。）おみちは子供(こども)のようにうなずいた。嘉吉はまだくしゃくしゃ泣(な)いておどけたような顔をしたおみちを抱(だ)いてこっそり

耳へささやいた。（そだがらさ、あのあんこ肴(さかな)にして今日ぁ遊ぶべじゃい。いいが。おれあのあんこうなさ取(と)り持(も)づ。大丈夫(だいじょうぶ)だでばよ。おれこれがら出掛(でか)げて峠(とうげ)さ行ぐまでに行ぎあって今夜の踊(おど)り見るべしてすすめるがらよ、なあにどごまで行がなぃやなぃようだなぃがけな。そして踊り済(す)まってがら家さ連(つ)れで来ておれ実家(じっか)さ行って泊(とま)って来るがらうなこっちで泣いて頼(たの)んでみなよ。おれの妹だって云えばいいがらよ。そしてさ出来ればよ、うなも町さ出はてもうんといい女子だづごともわがら。）

　おみちの胸(むね)はこの悪魔(あくま)のささやきにどかどか鳴った。

それからいきなり嘉吉をとび退いて、(何云うべ、この人あ、人ばがにして。)そして爽かに笑った。嘉吉もごろりと寝そべって天井を見ながら何べんも笑った。そこでおみちははじめて晴れ晴れじぶんの拵えた寒天もたべた。餅もたべた。キャラメルの箱と敷島は秋らしい日光のなかにしずかに横わった。

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
　　１９９６（平成８）年６月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　１９９５（平成７）年５月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
２００９年８月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。